

無痛分娩

～みなさまの笑顔と安心のために～

東京女子医科大学 八千代医療センター
麻酔科 母体胎児科 新生児科



はじめに

出産に伴う痛みは、個人差はあるものの想像を絶するものです。ひと昔前は出産には痛みを伴うことが当たり前でしたが、現在は痛みを麻酔で和らげながら出産することもできます。当院では麻酔科・母体胎児科・新生児科で力を合わせ、妊婦さんと生まれてくる赤ちゃんの安全を最優先に考えながら無痛分娩の対応をしています。

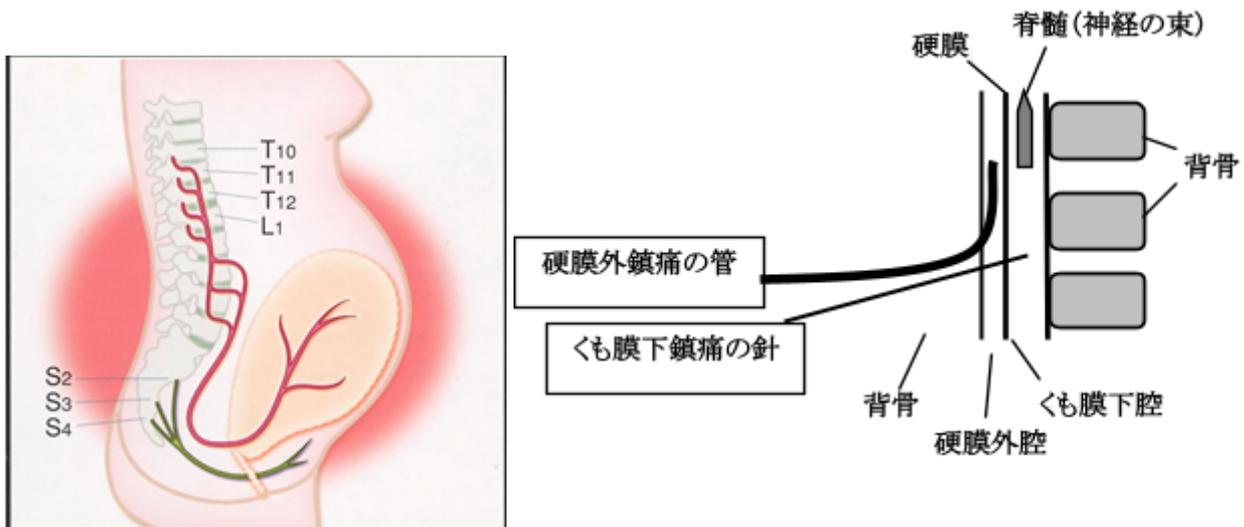
妊娠・出産というご家族にとって大きなイベントを、よりすてきな思い出になるよう、お手伝いさせていただければ幸いです。

1. 無痛分娩の方法

当院では基本的に硬膜外麻酔を用いた無痛分娩を行っています。お産の進行状況により脊椎くも膜下麻酔を併用することもあります。この方法は世界的にもっとも一般的に用いられている、安全な分娩時鎮痛法です。鎮痛効果が高く、赤ちゃんへの悪い影響が非常に少ないのが特徴です。またお母さんが眠くなる作用もありません。感覚を全くなくすのではなく、耐えられる陣痛になるようにコントロールします。

硬膜外麻酔は、細くて柔らかいチューブ(直径0.85mmのカテーテル)を背中から硬膜外腔まで入れ、麻酔薬を少しずつ注入して痛みを和らげる方法です。硬膜外腔に入れたカテーテルから薬が入り、硬膜からゆっくり脊髄に伝わることで陣痛の痛みをとっていきます。

赤ちゃんが生まれるまでの間、お母さんと赤ちゃんの両方の様子を注意深くモニターしながら薬を投与していきます。



診断と治療社「産科と婦人科」70:41,2003より

2. 硬膜外麻酔の実際

無痛分娩は LDR(陣痛Labor・分娩Delivery・回復Recovery)というお部屋で行います。

① 麻酔中の水分補給や薬剤の投与経路確保のために、麻酔前に静脈点滴をします。

② 硬膜外カテーテルを背中の中の腰のあたりから挿入します。座った姿勢、または横向きに寝た姿勢で背中を丸めていただき、背骨の間からカテーテルを入れやすくします。

挿入されたカテーテルは背中にテープで貼り付け、先端を肩口から出します。その後、先端を機械につなぎます。カテーテル挿入後、仰向けに寝ることも可能です。

カテーテルから薬を注入する機械には、ご自身で押していた





だけのボタンがあります。それを押すと追加の薬が注入されます。ボタンは何回押しても安全な量までしか入らないように機械がコントロールしていますので、痛いときは遠慮なく押しください。

麻酔はボタンを押した直後ではなく数分から数十分後に効いてきます。少し痛みが強くなるのを感じたら早めに押し続けてください。

3. 無痛分娩を始める時期

当院では無痛分娩を計画分娩で行っています。分娩予定日の前日より入院し、分娩予定日の朝より陣痛促進剤を開始します。陣痛発来し、子宮口の開き具合をみながら、希望されたタイミングで麻酔を開始します。お産の進み具合によって、夜間や休日にかかってしまう場合は麻酔科スタッフが対応できないこともあります。産婦人科スタッフと協力して可能な限り対応させていただきます。

出産前に無痛分娩を希望していたとしても、妊婦さんのご希望で結果的に麻酔をしないで出産するという選択もできます。逆に、出産直前で無痛分娩に変更することはご遠慮いただいております。そのため、少しでも無痛分娩をご検討されている方は、出産前に担当産婦人科医にご相談されることをお勧めいたします。

4. 無痛分娩中の過ごし方

① お食事・水分摂取

麻酔を始めてからは基本的には食事はとれませんが、お水、お茶、スポーツドリンクは飲むことができます。陣痛中の胃腸の動きはより鈍くなっており、嘔吐した時の問題点から食事は控えた方がよいとされているためです。無痛分娩中は点滴により水分補給を行います。

② 麻酔導入後の歩行

子宮収縮の痛みが和らぐと同時に、足の感覚も鈍くなったり、動かしにくくなったりします。転倒予防のため、麻酔が始まってからは歩行せず、ベッドで過ごしていただくのが原則です。尿意や排尿の感覚も鈍くなりますので、必要に応じて管を入れて尿を排出(導尿)します。

③ 胎児心拍モニタリング

胎児心拍モニターは麻酔開始後から赤ちゃんが生まれるまで付けていただきます。

④ 妊婦さんのモニタリング

血圧は麻酔開始直後は頻回に、その後も基本的には30分おきに測らせていただきます。ほかに、心電図と身体の中の酸素の値を見るモニターを付けていただきます。

⑤ 姿勢

麻酔中ずっと同じ姿勢にならないようにスタッフが定期的に体の向きを変えるお手伝いをします。麻酔のお薬が効く範囲を広げたり、長時間同じ姿勢でいることによる神経障害や皮膚トラブルを予防したりするためです。

5. 無痛分娩のメリット

無痛分娩の一番のメリットは耐えがたい痛みを格段に和らげることができることです。それに伴い、下記のようなメリットが他にもあげられます。

① 痛みが少ないことから、リラックスして分娩することができます。

② 痛みによる妊婦さんの体力の消耗を最小限にすることができます。そのため、産後の体力の回復も早いと言われています。

③ 医学的な理由で分娩時鎮痛が望ましい妊婦さんもいます。心疾患を持っている場合、精神的な理由でストレスを減らしたい場合などです。



④ お産の経過中に帝王切開が必要になった際にも、無痛分娩の麻酔薬を変更することにより、迅速に帝王切開の麻酔に変更することができます。

⑤ 当院では計画分娩となるため、事前に入院日がわかります。そのため、他にお子さんがいらっしゃる方やご家族のお仕事がある方は出産日に向けて事前に調整することができます。

6. 起こりうる問題点

無痛分娩は分娩時の鎮痛を主目的とした医療行為となります。医療行為には避けることができない副作用や合併症が起こります。

① 血圧低下

起こりやすい副作用のひとつです。血圧の監視を厳重に行い、低血圧防止のため分娩時鎮痛中はベッド上で横向きで過ごします。低血圧になったときには血圧を上げる薬剤を投与し、点滴による水分の補給を増やします。

② かゆみ

ときに麻酔薬の影響で妊婦さんの体にかゆみを生じることがあります。通常かゆみの程度は軽いですが、氷枕などで冷やすほか、つらい場合は薬剤で対応します。

③ 発熱

38℃以上の発熱をきたす可能性が10%程度といわれています。無痛分娩による発熱は赤ちゃんに対する影響はありません。分娩後自然に解熱することがほとんどですが、発熱の原因を調べる為に採血などの検査が必要となる場合があります。

④ 頭痛

まれに硬膜外麻酔によって針や管が硬膜を傷つけ、分娩後のお母さんに頭痛が起きることがあります。もし頭痛が起きた場合も1週間程で落ち着いてきますが、症状が長引く場合などは積極的に治療することもあります。

他に、非常にまれで重篤な合併症として硬膜外血腫・感染、神経障害があります。詳しい説明を希望されるかたは麻酔科外来でお尋ねください。

7. 無痛分娩の赤ちゃんとの分娩経過への影響について

無痛分娩に使用する麻酔薬が、赤ちゃんへの直接的な悪影響を及ぼすことはありません。しかし、麻酔の有無に関わらず出産の際には10人に1人の赤ちゃんに何らかの医学的介入が必要とされています。当院はNICUも併設されている総合周産期母子医療センターです。もし、生まれた赤ちゃんの具合が悪い場合は新生児科医による治療が受けられます。以下に麻酔による分娩への影響を示します。

① 分娩遷延

麻酔の影響によりお産の進行がゆっくりとなることがあり、子宮収縮薬の使用量が多くなることがあります。

② 吸引分娩・鉗子分娩

麻酔の影響で最後にいきむ力が弱くなる場合があります。その場合、分娩を円滑に進めるために吸引分娩・鉗子分娩となることが増えると言われています。帝王切開になることは増えません。

③ 胎児心拍数の低下

無痛分娩中は、麻酔薬そのものの影響や血圧低下により赤ちゃんの心拍数が下がる場合があります。迅速に対応する必要があるため、頻回の血圧測定や、胎児モニターを常時付けています。

8. 麻酔科外来の受診

無痛分娩を希望されている場合は、出産前に麻酔科外来の受診が必要となります。他の産婦人科病院に通院していらっしゃる場合は紹介状をお持ちいただき、当院の産婦人科外来を受診して無痛分娩希望の旨をお伝えください。妊婦健診日と合わせて麻酔科外来の予約を産婦人科外来でとっていただきます。妊娠34週以降か



ら出産予定日の間に麻酔科外来を受診していただいております。陣痛が来る前であれば外来受診は可能です。麻酔科外来では、無痛分娩が安全に行うことができるかどうかの確認や、麻酔についての追加説明を行います。少しでも疑問があればなんなりと質問してください。

みなさまが無痛分娩のメリット・デメリットを十分理解し、安心して分娩日を迎えられるようお手伝いいたします。

東京女子医科大学八千代医療センター スタッフ一同

おすすめリンク: 日本産科麻酔学会 無痛分娩Q&A
http://www.jsap.com/pompier_painless.html

